

(33)

氏名(生年月日)	中 野 達 也
本 籍	ナカ ノ タツ ヤ
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第426号
学位授与の日付	昭和55年11月21日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	乳癌の再発に関する病理学的研究
論文審査委員	(主査)教授 織畑 秀夫 (副査)教授 梶田 昭, 教授 田川 宏

論 文 内 容 の 要 旨

目的

乳癌による死亡が増加しつつある我が国の現状で、その治療成績を現在以上に向上させるための近道は、再発(転移)をいかにして抑制するか、ということであると思われる。

本論文では、著者は、乳癌患者死亡例について病理解剖学的に検討して、乳癌が体内でどのように拡がって、個体を破壊していくのかを考え、進行乳癌・再発乳癌の治療成績の向上に役立てることを目的とした。

研究材料及び方法

東京女子医科大学第2病理学教室において、昭和39年12月から、昭和53年12月までの14年間に取扱った乳癌患者剖検例20例を研究材料とし、これらの症例について、臨床記録・剖検記録を合わせ検討するとともに、全例について、病理組織標本(主として、マッソン・トリクローム染色による)を検鏡し、腫瘍の組織像および主要臓器の病変について検討を行なった。

成績及び結論

1) 症例は全例女性。死亡時年齢は、24歳から66歳にわたっているが、ほぼ半数は50歳代の例で占められている。

2) 20例中17例については、外科的治療が生存時に加えられているが、術後1~2年で再発したものが多く、術後5年以上を経て再発を見ているのは、T₂ aN₀M₀ Stage IIの症例1例のみであつた。これに対し、術後1年以内に再発した3例は、いずれも、手術時既に Stage IIIに達していた例であつた。

3) 再発後の生存期間は、6カ月ないし1年の例が多いが、3年以上も生存したものが3例あり、再発確認後に選択される治療法とも関連して、再発例でも、かなりの延命が可能であることを示している。

4) 術後の初再発は、患者胸壁皮膚および腋窩あるいは鎖骨上窩のリンパ節における再発が最も多いが、その他過転移、肺、胸膜転移も多い。

5) 剖検によつて、遠隔転移は最も高率に肺(90.0%)に認められ、以下、肝(60.5%)、骨(60.0%)、皮膚(60.0%)、腎(40.0%)、副腎(30.0%)、脳(20.0%)が、これに次いでいる。

6) 剖検標本により、つまり、乳癌再発巣において、その組織型を決定することは、同一例についても、基質の形成度は転移臓器によつてかなりの変動があるため、難しいことであるが、髄様腺管癌の枠内に入るものが最も多い。

7) 乳癌の再発病巣において、肝では類洞壁、肺胞壁というように、既存の構造を維持し、これを基質として利用しながら発育が起こっていることは、一つの組織学的特徴であり、これは、乳癌の組織破壊の傾向が比較的小さいことを示していると思われ、乳癌の経過が一般に長いのも、ある程度、この事実で説明可能であると思われた。

8) 検索症例20例中、2例において患側胸壁に扁平上皮癌の発育を認めた。また、これらの中に、2例の他臓器との重複癌例が含まれていた。

9) 大部分の例で、死亡時、全身的いそう、諸臓器

の萎縮が著しい。

10) 乳癌患者の経過において、胸水貯溜は患者の予後を直接左右する因子の一つであることは明白であるが、

胸水の貯溜と組織学的胸膜転移との間には、並行関係を認めない。

論文審査の要旨

本論文は乳癌患者死亡例について剖検記録と臨床記録を合わせ検討すると共に、病理組織標本を検鏡し、腫瘍の組織像および主要臓器の病変について検討したもので、乳癌の治療と進展度および再発した臓器、組織との関係を明らかにしたもので、学術上価値あるものと認める。

主論文公表誌

乳癌の再発に関する病理学的研究。

東京女子医科大学雑誌 第50巻 第6号
431～449頁（昭和55年6月25日発行）

副論文公表誌

1) 外傷性十二指腸損傷について。

東京女子医科大学雑誌 43（1・2）150～160
（昭48）

2) アスベスト塵の高度の肺内沈着を認めた肝膿瘍の1剖検例について。

東京女子医科大学雑誌 48（7）548～556
（昭53）

3) 受傷10日目にイレウス状態を呈したシートベルト外傷の1治験例。

東京女子医科大学雑誌 50（5）410～413
（昭55）